

特集 生活者の格差論

● 格差論をめぐる多様な論点

格差に対する不安はどうして生まれるのか？ 土田 昭司

所得格差のどこが問題なのか？ 佐藤 俊樹

経営者の意識を変えることが高齢化社会の格差を縮小する 樋口 美雄

少子高齢社会にひそむ所得格差を考察する 宮里 尚三

格差が拡大し固定化する危険 三浦 展

メディアが送り出す情報の「真実」を見る目が重要 菅谷 明子

多文化社会と子どもの教育格差 関口 知子

格差固定化の防止にはいつその構造改革を 八代 尚宏

格差経済へのもう一つの政策視点 塩沢 由典

格差社会を克服する社会保障体系 神野 直彦

資産格差の露呈とコミュニティ・セーフネット 高坂 健次

格差に対する不安は どうして生まれるのか？

土田 昭司 *Interview with Shoji Tsuchida*

「不安」と「恐怖」は違う

今回、現在の日本社会における「不安」の要因は格差なのかと問われたのですが、結論を先に言うと、私は、厳密な意味では、それは違うと考えています。実際に、いくつかの世論調査などで、現在の生活に不安を覚える人が増えていることが示されているのは事実です。しかし、社会心理学研究を行っている者としては、厳密に言えば、「不安を覚えさせるような情報が流れているから不安を覚え、その理由に「格差」が挙げられている」とも思われるのです。

まず、そもそも「不安」とは何なのかを考えてみましょう。「不安」は私たちの感情の一種ですが、「不安」は「恐怖」の上位概念であると考えられています。「不安」と「恐怖」は似てはいるのですが、大きな違いが一点あります。

「恐怖」は、自分の生命などが脅かされる明確な危険があることを知覚して、それまでの全ての活動を中止して、ひたすら逃げるといふ行動に向かわせる感情のことを言います。

一方、「不安」も逃げるといふ行動に向かわせる感情ではあるのですが、将来に対して「漠然」と自分が年をとったら、生活ができなくなっているのではないだろうか」といふように、明確な危険があるかどうか

分からないのに心配をする心理的な状態を言います。つまり、「不安」は「恐怖」とは異なっており、明確な恐怖を生み出す対象物があるかないかよく分からない状態において、恐怖の対象物が本来にあるのか調べようとしている時に生じる感情であると理解できます。

では、「格差社会」で生じると考えられている「不安」とは何でしょうか。それは、簡単に言えば「他人と比較して、自分が将来何か不利益を被ることになるのではないかと」思うことではないでしょうか。例えば、「将来、自分が生活していくことができないのではないかと」、「少子化が進んで、どんどん人口が減って、年金は破綻するのではないかと」考えて、不安になっている人は多いかもしれませんが、将来のことは誰にも分からないのです。ひよっとすると、劇的な変化が起こって、少子化は解消されるかもしれませんが、あるいは、あるいは、かつての高度成長期のように非常に景気がよくなったら、年金の不安などはなくなるかもしれません。あるいは逆に、どんどん子供が少なくなり、景気が悪くなれば、国そのものの存在が危うくなるかもしれません。しかし、誰も将来がどうなるかなど、本当のところは分からないのです。

このように「不安」とは、例えば高齢社会化が進む中で、老後の生活が不安だ」といふように、直接的な危害は被っていないのに「漠然としたもの」に対して心配している状態

あると言えるでしょう。

将来の不確実なことを過度に気に病むのはあまり生産的ではないことも多いのですが、結局、それでも不安を感じてしまう大きな原因の一つには、先ほど言いましたように、他人と自分を比較している心理状態があると考えられます。食べるだけのお金があればよいと考えている人であれば、本当なら年金だけで十分にやっていけるので、将来に不安を感じる必要はないのかも知れません。しかし、他のもっと裕福な人の生活ぶりを知って、自分も他の人のようにたまには寿司を食べに行く生活をするのが本当なのではないか、たまには旅行に行くべきなのではないかと思うと、年金だけでは足りなくなってしまう、その原因が「格差」であると思う、「このままでいいのか」と不安を生み出してしまうのです。

つまり、自分の中に絶対的な基準がないため、「他の人に比べて自分が損をしている」とか「もっと上手くやれるのではないのか」と思い、自分の現在の境遇に不満を持ち、そして不安を覚えることとなります。

私は社会心理学を専門にしている者ですから、経済学的な現象についての断定的な発言は控えたいのですが、実際に、昔に比べて所得の格差は広がっているのかもしれない。しかし、そうだとしても、他人にどれだけの収入があり、どついつい暮らしをしているのかを知らなければ、自分の現状が「勝ち組」であるか「負け組」であるかなど分か

らないはず。つまり、マスコミなどを通じて、自分と同じような年代の人たちが自分より遙かにいい暮らしをしているように感じ、「この差が固定化、または拡大して、みじめな老後や周囲に迷惑をかける状況になるのではないか」と思い、不安が生まれるのだと思います。

絶対的な尺度がないために

生まれる「格差」の感覚

現代人は、自分でものこを判断しているつもりですが、ほとんどの人が自分の中に絶対的な尺度を持っていないため、実は他の人の判断を受け売りして、物事を決めていけると言えます。

私は、以前よく大学の授業中に「太陽系の惑星はいくつあるのか？」と学生に質問しました。するとほとんどの学生は「九つです」と答えました。そこで、どうして九つだと言えるのか？とさらに聞くと、「教科書に書いてあったから」とか、先生がそう教えてくれたから」と答えます。しかしここで考えてください。確かにこれまでの教科書などでは、そう書いていますが、それを確認したのは誰でしょうか？ 実際に自分で天体望遠鏡を使って自分の目で確認した者は何人いるのでしょうか？ しかも、その時は、「九つ」となっていました。冥王星が発見される前

は「八つ」でしたし、他の惑星に比べて冥王星は極端に小さいために惑星から除外すべきだという意見もあると話す。学生たちはとまどった表情をうかべたものでした。このように、自分の経験や知識の大半は、他人が与えた知識を情報として取り込んで、自分のものだと思いこんでいるだけの、実際は不安定なものです。

『自分で判断している』わけではないのに、そう思うてしまう心理の根幹にあるのは、大勢の人々と「同じ」でいたいという心理です。同じだからこそ、他人も同じような境遇であれば安心する反面、異なる人、特に同じようなことをしているのに、相手の方がお金を儲けているとか、社会的に認められているとか、『自分は損している』と知る機会があれば、不満を覚え、その理由に「格差」を挙げるわけです。

例えば、江戸時代に山奥の村に住んでいた人は、その人生のほとんどを自分の村の中で過ごし、大坂の商家の繁栄ぶりなどを知らずともなかつたでしょう。おそらくは貧しい暮らしをしながらも、周囲も同じような人たちばかりですから、「格差がある」と感じることはなかつたはず。そうした村に住む人たちは、大変だったかもしれないが、周囲と同じような暮らしをしていれば、「村八分」にもならず、生涯、それなりに幸せだったはず。

ところが、今の日本のように高度情報化社会になってしまうと、自分が暮らしている

のとは別の世界があり、その住民は想像もできないような暮らしをしていることを知ることができます。『自分も同じようなことをしていれば、もっと違う現在があったのではないか』とか、『これからもチャンスがあれば、自分もあちらの世界に行けるのではないか』と考えることができるようになったのです。そしてそれが叶わなかった時に、『自分は負け組である』といったような格差を感じるわけです。

二種類ある『現実』と社会的不安

将来がどうなるか分からないから不安を覚える。では、その前提となる現実とは、何でしょうか？

社会心理学的に考えると、『現実』には二種類あると言えます。

一つ目が、『物理的な現実』です。これは最も分かりやすい現実ですが、五感を使って、『暑い』『や』『寒い』『痛』『や』『気持ちいい』などなど、身体で確かめられる現実のことを言います。

二つ目が、『精神的な現実』です。例えば、携帯電話の電磁波や医療で使われるレントゲン(X線)は、私たちは『ある』と信じていますが、実際には電磁波やレントゲン(X線)を見ることも感じることもできません。このように、五感で存在を確認できないけれ

ども『ある』と信じるものを『精神的な現実』と言います。したがって、『精神的な現実』には、例えば、死後の世界や幽霊などの『オカルト的』なものも含まれます。

そして三つ目が、『社会的な現実』です。これは一口に言えば、自分の周囲の人たちの精神的な現実のことです。つまり、他のみんながどう考えているかということから生み出される現実のことです。これは、先ほど例で挙げた『太陽系の惑星の数は？』という質問にもつながります。つまり、世間の人たちが『九つだ』と言っているから、『九つに違いない』という判断をするということなどは、この『社会的な現実』によって、『現実』と認識されているわけです。

社会的な不安も、この『社会的な現実』が引き起こしていることがほとんどです。つまり、『みんなが不安に思っているから不安になる』わけです。またあるいは、『みんな同じだと思っていたのに、よく見ると同じではない人がいる。私だけ取り残されているのではないのか』という心理も不安を生み出していると言えます。

こうした心理状態を生み出す大きな担い手は、言うまでもなくマスコミ(報道機関)です。高度情報化社会において、『社会的な現実』のほとんどはマスコミによって形成されていることは、ここで指摘するまでもないでしょう。ただ、少なくとも民間のマスコミは基本的にCMや広告で成り立っている企業であり、それはすなわち視聴率や販売部

数を伸ばさなくてはいけないという宿命を背負っていることも注意しておく必要があるでしょう。マスコミは、人々が関心を示す情報は取り上げるけれども、関心を示さない情報は取り上げることが経営的視点から言えば難しいのです。

では、人はどのようなコースや出来事に関心を寄せるのでしょうか？

一般に、人間は、安全であるという情報よりも、危険であるという情報に、より関心を示すことが明らかにされています。つまり、『用心しないと大変な目に遭いますよ』とか、『すぐそこに危機が迫っています』といった、自分の生活を脅かす『何か』に対する情報は私たちの関心を引きやすいのです。

例えば、『誰々さんは、とても幸せに、平和に暮らしています』という内容よりも、『どここの夫婦は危ない』、『どこかの国では、日本をターゲットにミサイルの開発を進めている』といったように、少しでも不安の要因があることを取り上げて紹介する方が、人々の興味関心を引きやすいのです。ですから、マスコミにとっては、視聴率や販売部数だけを考えるのであれば、危ない何かがあることを取り上げた方が有利なのです。もしそのような姿勢でマスコミが情報を選択したとすれば、結果的に将来に対する不安を煽る方向の報道が多くなることとなります。

もちろんマスコミには、『将来に起こるかもしれない事故や戦争などを、少しでも早く人々に知らせる』使命がありますから、

予防原則的に少しでも危険があるようであれば、マスコミは大きく報道すべきであるという論理もあります。しかし、数年前にあった所沢の野菜汚染報道によって生じた風評被害のように、危険であるという報道は私たちに不安を生じさせて、結果的に適切ではない行動をとらせてしまうこともあります。

このように、『社会的な現実』には、客観的な基準がないことが多いので、その「目に見えない」現実に戻り回されないように注意する必要があります。

.....

専門家を軽視する現代社会

.....

話は少し横道にそれますが、高度情報化社会による「知ったつもり」による弊害は、色々な問題を生み出しています。その代表的なものが、『専門家より知識がある』と思ってしまうことでしょう。最近では、インターネットが普及していますし、高学歴化社会になっていることもあって、色々な情報を仕入れた人たちが、専門家よりも知識があると思いきや、平気で、あれは駄目だ、「こうすればいいのに」と口にする、いわゆる「一億人総評論家」状態になっているように思われます。

つまり、自分の経験やよく考えた上での判断に基づいた自分の意見ではなく、実際

には、ただ他人の批判や知識を受け売りにしているにもかかわらず、もう自分は十分に知識があると錯覚してしまうことが私たちにはあるのです。先ほども言いましたが、自分の中に絶対的な基準があるわけではなく、他人の価値観や知識にのっとって判断しているのがつかず、ついそう思ってしまうわけです。

確かに現代社会は、専門家が扱う分野が細分化されているため、科学なら科学全ての知識を持つ人などほとんどいません。しかし、やはり専門家は専門家だけにしか持つことができない知識を身につけているのです。それをよくも知らないで、知ったつもりで気軽に批評してしまう。そうしたことも、今回のテーマである「格差」があると感じる人が多くなってきたことの原因の一つになっていると思われれます。

人は、なかなか自分の価値観をもったり、それによる判断ができないため、つい集団に入ったり(この集団には自分が信頼している「ニュースキャスター」や「解説者」が出演する報道番組なども含まれます)、その集団が提示した価値を、自分が判断した価値であるように考えがちです。しかしこれは、逆に言えば、その集団を牛耳る人間の意図に操られやすいことでもあります。こうした傾向が極端に現れたのが、俗に言う「カルト集団」というもので、この方向性を押し進めれば、メインドコントロールになっていきます。

話が、かなり違う方向に行ってしまうし

たが、結局、現代の日本において、格差というものが現実にあるかないかに関わらず、マスコミなどのメディアが、自分の今の暮らしとは違う世界の価値観を提示することで、そこに不満が生まれ、そして格差があると感じるようになってしまっているのではないかと、いつかとなのです。

.....

『自分だけは損をしたくない』
という気持ちで不安を生み出す

.....

動物行動学者のローレンツ(ハ、ライオン)のような強い動物は、攻撃の仕方を知っているが、弱い動物は、ただ無闇に襲いかかる」と述べました。人間は基本的に弱い動物です。すから攻撃するよりも攻撃されることに注意を向ける習性があります。つまり、エサ(利益)をどうやってとるかよりも、自分が襲われること(危険)の方に考えが向きやすいため、頭の中で危険なことや悪い予感などについてより一生懸命に考える傾向があるのです。

そのときに問題になるのが、『自分だけは損をしたくない』という気持ちです。例えば、実は飛行機の墜落事故ではバックはおきません。バックが起ころのは、映画「タイタック」で描かれたように船の事故の方です。この差は、飛行機は落ちると全員が助かりませんが、船は救命道具や非常用ボ-

トが手に入れば、自分だけは生き残れるかもしれないことから、取り合いになりパツクが引き起こされるのです。

「格差が社会不安を生み出す」とすれば、同様のメカニズムが働くと思われれます。『今やつておかないと将来は大変なことになる』『年金も破綻するし、もう駄目だ』という中で、『自分だけは取り残されたくない』というパツク状態になっているからこそ、社会不安が生み出されていると言えます。つまり、冒頭で結論として述べたように、格差が不安を生み出しているのではなく、自分の中に絶対的な基準がないことから、他人と比較してしまい、自分も上手くやったら格差社会を切り抜けるはずなのではないか、と自分の現在の境遇に不安を覚えていくのが本当だと思います。そしてまた、こういう傾向は高学歴で知的な人ほど陥りがちであるだけに、やっかいとも言えます。

社会心理学の専門家として言いたいのは、落ち着いて自分の周りを見回して欲しいということ。そして、今の自分が判断基準としているものが、本当に自分の知識や経験をもとにしたものなのかどうかを見極めて欲しいと思います。冷静になって社会を見れば、格差社会で『不安だ』と思っっていることの大半は、『何々に比べて、私の現在の境遇は低い』『上手くやらなければ取り残される』といったようなことから発生しているはずであり、実際の人生の幸せは、そのようなことは他の基準で決まることの方が多いのではないでしょうか。

CEL (この記事は、CEL編集部が土田氏にインタビューを行い原稿としたものです)

() オーストリアの動物学者で、比較行動学の創始者。一九七三年にティンバーゲンとともにノーベル医学・生理学賞を受賞。動物の種に固有な行動型の形成メカニズムを研究し、インプリンティング(すり込み)の概念を唱えたことで知られる。

□ 土田 昭司(ちただ・しょうじ)

関西大学社会学部教授、日本リスク研究会会長、日本消費者行動研究会副会長。専門は社会心理学。一九五七年山形県生まれ。八〇年東京大学文学部社会心理学専修課程卒業。八二年同大学大学院社会学研究科社会心理学専門課程修士課程修了。八六年同大学大学院社会学研究科社会心理学専門課程博士課程単位取得満期退学。大阪大学人間科学部助手、明治大学文学部専任講師・助教授などを経て、九七年より現職。著書は、『若者の感性とリスク：ベネフィットからリスクを考える』(共著、北大路書房)、『対人行動の社会心理学：人と人との間のところと行動』(編著、北大路書房)、『感情と行動：認知・生理・感情の社会心理学』(共編著、誠信書房)など。